

画が持つオリジナリテイの秘密の一端はここにある。

一九二四年、フィリップスは十か月間英国に帰った。そこで彼は、Y・漆原という日本の版画家と知り合った。フィリップスは極めて多作の版画家で、四十年間に木口木版六十点以上、色刷り木版画百三十点以上を制作、すべて自刷りで時には百部以上刷り、その作品の多くは日本人の作品と比較され、好評を得ている。しかしこの比較は当を得ていない。モネ、ドガ、ホイットスラーの場合と違い、彼の作品に見られる日本の影響は、構図上の類似点よりむしろ技術面に多く見られるからである。漆原はフィリップスに日本の材料や技法を教えたが、それ以上の影響は与えなかった。淡く、霞んだ色調が一見同時期の日本の版画に似ていたに過ぎなかった。

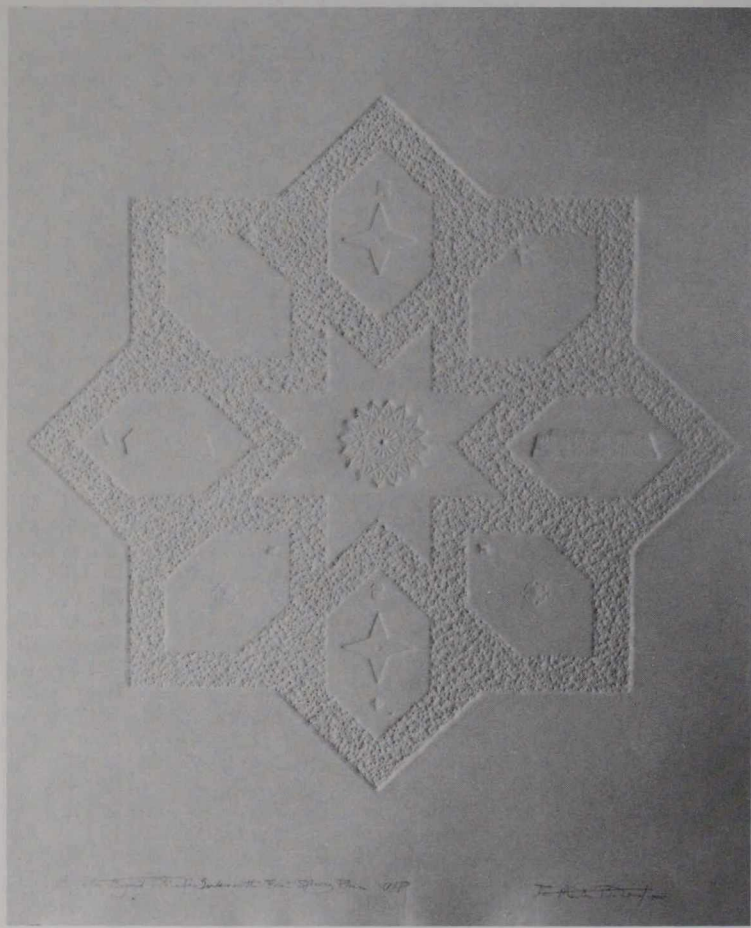
フィリップスの版画は、同時代の他の版画家の場合と同様、真の美を求めつつ個性豊かに表現された作品である。挿し絵の手だてとしての版画は、すでに過去のものとなっていた。

カナダ美術界で版画の第二開花期の幕を切って落したのは、まさにカナダ版画の父と仰がれているアルベール・デュムーシエルである。

フィリップスの場合と同様、デュムーシエルも版画の技術はロンドン出身のジエームス・ロウに手ほどきを受けただけである。が、この制作欲に燃える独学の版画家の双肩には、一九四二年、モントリオールの新しいグラフィック・アート・

スクールに美術科を新設するという大任がかかってくる。この異色の教師は、教科課程でもとくに「アート」の面に重点を置き、彼自身も版画制作の知識、実技、両面の完成を目指した。パリでも、石版、銅版、木版と様々なワークショップで仕事をしており、彼の足跡を辿ることができ。デュムーシエルは、一九七一年に世を去るまで三十年にわたり教鞭をとり続けたが、その啓示に富む指導を受けた一群の版画家、刷師がモントリオールで頭角をあらわした。彼等は、今では先輩格として、カナダのこの地方の若手版画家達に影響を与える立場になっている。

名人デュムーシエルの情熱は程なく実を結んだ。すでに一九四九年には、デュムーシエルの弟子ローラン・ジゲールが設立したエディシオン・エルタから、トロンブレイ、デュムーシエル、ポードン、フェロン、ジゲール等、錚々たる作家の版画で飾られた豪華版十数点を出版している。その十年後には、エディシオン・ゴグレンが銅版画集をポートフォリオ形式で、またリチャード・ゴグレンがそれぞれ手画きの詩を彫り込んだ九枚の色刷石版画集「ピエール・ド・ソレイユ」を、同じくポートフォリオとして出版した。以上は、一九六〇年以前にもモン



パット・マルティン・ベイツ「A Star Beyond Stars for Gordes in the first Spinning place」
(エンボシング)

トリオールの版画界が、すでにある程度の成熟度に達していたことを示している。当時、欧州では同類の作品が定期的な世に問われていたとはいえ、カナダにおけるスタートとしては申し分ないものであった。

各地のワークショップ

ポートフォリオ出版の経験、版画制作に伴う複雑な技術、それに当然のこととして経済的要素などが重要な動機となつて、プロフェッショナルな版画家がグループ制作を指向するようになった。芸術家一般にとつて、とくにカナダ人気質にとつてかけがえのない個人主義に代わつてグループ制作、ワークショップ作りが始まった。

私の知る限りにおいて、カナダで最初の自由で開かれた版画のワークショップは、一九六三年リチャード・ラクローワの手による「アトリエ・リール・ド・リシエルシ・グラフィック」であった。十三年間に、このアトリエで仕事をした版画家の数は二百五十人を超えるが、技法も様々で銅版（ラクローワがバリの「アトリエ17」でヘイターから学び、モントリオールの版画家に伝えた）、石版、シルクスクリーン、凸版、モールドド・プラスチック、その他ミックスド・メディア、キャンバス刷等であった。三年後の一九六六年、ラクローワは別個の団体としてラ・ギルド・グラフィックを加えたが、これはカナダの有能な版画家達の作